

氏名 邱麗君
学位 位 博士（日本言語文化学）
学位記番号
学位授与年月日
審査研究科 外国語学研究科
論文題目 日本語教育を視野に入れた指示詞の日中対照研究
—非現場指示を中心として—
論文審査委員 (主査) 大東文化大学教授 田中 寛
(副査) 大東文化大学教授 丁 鋒
(副査) 大東文化大学准教授 福盛貴弘
(副査) 一橋大学教授 鹿 功雄 (外部審査)

博士論文 審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

以下、講評を含め、本研究の概要、審査会での審議事項を報告する。

1. 邱麗君氏の本研究の課題は、次の四点に集約される。

- 1) 日中両言語の指示詞が基本的な機能からほかの機能へ拡張する様相について、アспект・テンスとの関わり、有標識と無標あるいは不定標識の側面から日中指示詞の非対応と指示詞の省略現象が生じる原因を究明すること。
- 2) 照應指示用法の同じ枠組みにある日本語の「前方照應指示」と「後方照應指示」、中国語の「前指(cataphora)」と「回指(anaphora)」に焦点を当て、中国語の指示詞“这/那”が日本語の「コ・ソ・ア」系指示詞と狭義的な対応あるいは広義的な対応にある場合、指示詞の語形、指示用法、指示対象の類別、先行詞の有無、指示詞の文中に占める位置などを含め、日中指示詞の構成と機能の異同から日中指示詞の対応条件を考察すること。

3) 日本語教科書における用法別指示詞の全数調査を行う。各教科書に提示された指示詞の提示頻度、提示順、提示方法に着目し、調査対象の教科書を1シリーズ通して分析することによって、この教材の導入、提示、練習問題の設定という流れと、初級、中級、上級のレベルに応じて、どの指示詞、指示用法をメインに提出しているかを把握すること。

4) 日中指示詞の対照分析と、日本語教科書における全数調査の結果をもとに、日本語の教材作成への提案、教育現場での指示詞の指導などを含め、日本語教育への応用に結び付けること。

2. 次に、博士論文の構成および要約について述べる。

本研究は、序章、第1部（第1章・第2章・第3章）、第2部（第4章・第5章）、第3部（第6章・第7章）終章、全3部、全9章から構成される。末尾に詳細な指示詞研究文献目録を附している。

序章では本研究の動機と目的、研究対象、研究内容、研究方法について述べた。

第1章では、日中両言語の指示詞に関する従来の研究を概観し、各指示詞の概念や論理的な枠組みを整理したうえで、本研究の立場を明らかにした。

第2章では、日中指示詞の非対応表現については指示機能の虚化と拡張、中国語の指示用法の文法範疇に存在していない「観念指示」「絶対指示」用法などの各論点から分析し、日中指示詞の相違点を論じた。日中指示詞の非対応の原因を以下の3点にまとめた。a. 指示機能が低く、ほかの機能が発達している指示詞は日中両言語に存在しているが、接続機能を持つ中国語指示詞は接続機能を持つ「コ・ソ・ア」系指示詞より接続機能が弱いため、対応しにくい。b. 「同格指示」「同格指示の変形」「副詞的用法」は中国語の場合は指示詞と人称代名詞（指示対象を示す名詞、副詞）はそれぞれ指示対象を指すことができるが、日本語の訳文では指示対象は指示詞か人称代名詞のどちらか一方の指示しか受けないため、対応しにくい。c. 中国語文では進行中の動作を表す場合は“这…”で示すことができるが、日本語文では指示詞よりも、テンスとアスペクトを用いて表現するほうが多いいため、対応していない例も多い。また、中国語の指示用法には日本語の絶対指示用法と類似の用法（「Dem+年/月/曜日/日」）があるが、日本語の絶対指示と対応できない現象が際立っている。

第3章では日中指示詞の省略表現に関する先行研究を整理し、日中対訳作品の例文から見た省略表現を分析した。そこから日中指示詞の用法・機能の異同を見出し、日中指示詞が訳文で省略された原因を「指示機能」「指示用法」「構文」の三側面から論じた。指示機能については、指示機能より標識機能が強く、指示対象を取り立てる場合、指示詞の代わりにほかの品詞を使用して、取り立てる対象を焦点化する文では指示詞は省略可能である。また、中国語の指示詞“这”・“那”的指示機能が弱化し、指示対象が明確ではない場合、指示詞が省略される現象が多く見られる。指示用法については、「回指」用法として用いられた指示詞が指示する内容が少なく、文も短い場合、指示詞が省略される可能性が高い。構文については、指示詞の代わりに使用された人称代名詞、置き換え表現、名詞文などが指示詞と等価の効果がある場合、指示詞が省略可能などを論じた。

第4章では「前方照応指示」と「後方照応指示」の「コ・ソ・ア」系指示詞が“这”・“那”系指示詞に翻訳された用例を狭義的対応と広義的対応に分けて考察し、日中指示詞の構成と機能の異同から両言語の指示詞の対応条件を検討した。「前方照応指示」に関しては以下の3点を明らかにした。a. 「単純照応用法」の「コ」系は“这”と狭義的な対応している確率が高い。そして、話し手が聞き手を配慮し、婉曲的な依頼内容を伝える場合、前方照応指示の「コ」系指示詞は「回指」の“这”と広義的な対応を持つことが多い。b. 「ソ」系指示詞は“这”・“那”的両方と対応できるが、“那…”を使用した場合、話し手の物事に対する関心度が明らかに“这…”より低くなることがわかった。c. 話し手と聞き手に共通している出来事や経験、共有知識で使用されている「ア」系指示詞は“这”と“那”的両方と対応できる。話し手の長期記憶に蓄えられ、記憶に刻み込まれている場合、使用されている「ア」系指示詞は“那”と対応していることが明らかになった。「後方照応指示」については指示内容を直接引用する型は中国語の指示詞“这”・“那”と翻訳されるだけではなく指示用法も対応していることが判明した。

第5章では中国語の指示詞の照応指示用法（「前指」「回指」）に着目し、“这”・“那”が「コ・ソ・ア」系指示詞と対応している用例を考察した。「前指」の“这”と「コ・ソ・ア」の対応については次の3点の特徴が窺える。a. 指示詞“这么/这样/这样”は後文の内容を指して、後文では指示対象を説明するという典型的な「前指」用法の例は「コ」系指示詞と狭義的な対応する確率が高い。b. 「前指」の“这”が「ソ」系指示詞と対応する例は極めて少なく、その例のほとんどは指示詞を用いた文には前文と後文がある。c. 「前指」の“这”が「ア」系指示詞に訳されている例は“这么/这样/这样”のみで、話し手と聞き手が双方とも有している情報を表す会話文が多いことがわかった。

「回指」の“这”・“那”が「コ」・「ソ」系指示詞と対応している要因は原文の著者と日本語訳の訳者が同じ視点で物事を述べているかどうかである。たとえ過去の出来事であっても、聞き手により臨場感を持たせるために、近称指示の“这”を過去の時間として表す場合がある。それと同様に、訳者も翻訳

では近称指示の指示詞を用いることができる。「ア」系指示詞と対応している例は大体が人と物事を示す会話文で、日本語では話し手と聞き手の双方の領域に共存する知識であれば、ほぼ「ア」系指示詞を用いることができるため、“这”・“那”両方「ア」系指示詞と対応できることがわかった。

第6章では日本語教育における指示詞の研究の一環として、日本語教科書《新編日语I・II・III・IV》では指示詞の使用実態について6項目に分けて調査した。《新編日语》は現場指示と文脈指示を選別してまとめており、第1冊で説明しているのはこの教科書の特徴である。《新編日语》の4冊では多くの指示詞の例文を用いたが、明確な場面設定がなく、文脈もないケースが多く、観念指示を導入していないにもかかわらず例文を提示することから、学習者は指示用法を混用する可能性が高い。本来教材で取り扱う文法項目は学習段階によって難易度が変わっていくはずだが、《新編日语》では、現場指示用法の提示は第1冊の初級レベルに留まっていること、第1冊から第3冊まで指示詞の難易度がそれほど変わらないことから、難易度の高い指示詞の指導が重視されていないことが明らかになった。さらに現場指示用法と比べて文脈指示は文法項目として詳しく書かれておらず、説明の例文も少ないと、多くの文脈指示詞の用例は、指示用法の習得が目的ではなく、本文や説明対象ではない付隨的な要素として例文に出現するのみであるという事実が明らかになった。

第7章は第6章の調査対象が日本語科専攻の教科書であったのに対し、独学や第二外国語として学ぶ学習者の教科書である《標準日本語初级(上・下)中级(上・下)》における用法別の指示詞の全数調査を行った。《标日初级上》では現場指示に重点を置き、「対立型」と「融合型」に分けて説明し、《标日中级上》から文脈指示用法を正式に導入して文脈指示に重点を置き、前方照応指示と後方照応指示を区別して解説しているのは本教科書の学習しやすいところである。一方、《標準日本語》では多くの指示詞が提出されているが、指示詞の説明はほぼ意味上の説明に偏っており、「文法説明」と「練習問題」には、明確な場面設定や文脈がなく、どの用法であるかを判断できない例文が数多くある。観念指示用法の例文が見られるが、観念指示用法についての導入と説明がほとんど見当たらない。

終章では日中指示詞の対照分析と日本語教科書の調査の結果をまとめ、教育現場での指示詞の指導など日本語教育への応用を論じた。さらに、本研究の方法論的評価と今後の研究の発展について論じた。

3. 本研究において明らかにされた成果は以下の二点に要約される。

一点は【指示詞の日中対照研究】における成果である。本研究では短篇小説は57篇、中・長篇小説は38篇、合計95篇の対訳作品により、日中指示詞の会話文と地の文における意味的用法、指示機能の強弱の異同、使用範囲、指示詞と構文要素の関わり、指示詞の機能と文の展開との関わりを考察した。これにより非現場指示としての日中指示詞の指示用法、機能における類似点と相違点を明らかにした。

日中両言語の指示詞が対応しない原因を接続機能の発達、副詞的用法、同格指示、同格指示の変形、標識と不定標識、観念指示、絶対指示、アスペクトとの関わりという8つの側面から論述した。

日中対照研究の先行研究で議論されてきた日中指示詞の対応関係を改めて整理し、指示用法の対応、指示詞の語形の統一、指示領域の異同などの視点から、広義的対応と狭義的対応関係に分けた。狭義的対応関係を持つ日中指示詞は学習者にとって習得の障害にならないものの、広義的対応関係を持つ日中指示詞は指示用法や指示領域などが対応していないため、学習時に注意を要する多くの事例によって明らかにされた。

もう一点は、【日本語教科書における指示詞の調査】を通じて、中国人日本語学習者における使用傾向、比較的出現頻度の高い誤用の背景を明らかにした点である。中国で使用されている主要日本語教科書（専門課程、および第二外国語学習者向け二種類）における用法別指示詞の全数調査を通して、調査対象にした教材では現場指示用法と比べて、文脈指示用法はあまり重視されていないことがわかった。文脈指示用法説明の例文が少なく、多くの文脈指示詞の用例は指示用法の習得が目的ではなく、本文や説明対象ではない付隨的な要素として出現していることが明らかになった。

観念指示用法では中国語では指示用法の範疇ではないこともあり、日中指示詞の非対応を生む一因になっていることが判明したため（第2章）、中国人の学習者がこの用法を習得するには一定の困難を要することが推測される。一方、調査した教科書では観念指示用法の導入や解説がないにもかかわらず、当該用法が提示されていることがわかった。このことから、教科書開発、教材作成にあたっては文脈指示を重視し、明確な場面設定や文脈を設定すべきである点、指示詞を指導する際に、現場指示と文脈指示だけではなく、観念指示も加えるべきである点を主張した。

4. 講評および論文審査委員からの意見（要約）

これまで日本語の指示詞に関する研究は膨大な蓄積があり、また日中対照研究において多くの研究がなされてきた。本研究はその恩恵を受けながら、対照研究の観点から多くの用例を分析しながら、主として非現場指示の用法、日中指示詞の照応関係（対応、非対応）に新しい分析の

視点を構築した。とくに非対応の背景、誤用の生ずるメカニズムについて多くの事例を実証的に検証して新しい指摘を示した。さらに日本語教育の観点から、中国人日本語学習者の使用の諸問題、日本語教科書の使用傾向などを精査して、研究と実践の接点を考究しようとした。この独自の構成はこれまでの日中指示詞の研究において、いくつかの顕著な成果を示した。

審査会では主査は論文全般の構成、内容について確認し、言語学一般の領域からは博士論文としての正確性について、副査の福盛貴弘准教授から意見があった。対照言語学の観点からは副査の中国語学の丁峰教授から、指示詞の方言的要素からの位相、変容についての意見があった。指示詞研究、テクスト言語学研究を専門とする外部副査の庵功雄教授からは、対照研究の手法、指示詞の対話、談話的展開における観察等について意見があった。以下、その概要と講評を述べる。

本研究は日中対照研究の顕著な力作であるが、そもそも対照研究とは何かという研究方法について若干の疑問が残る。多くの用例を用いているが、諸用例は日本文学作品の中国語翻訳であり、翻訳者の制約は免れない。また、個々の事例の対応関係を精査し、記述する作業は重要であるが、その結果、どういう枠組みが明らかにされたかが学習者に寄与する成果であることを考えた場合、理論的意義付けにさらに研鑽を重ねていく努力が必要であろう。顕著な成果として、第2章の指示詞の拡張と虚化現象について詳細な分析を行った点、第3章の省略表現による日中指示詞の分布があげられる。

対照研究の観点からは第4章と第5章とが、それぞれ等価的な（日中、中日対照）観点から両言語の照応関係を分析した点は、いずれの言語にも偏ろうとしない実証的な研究手法として評価される。これにより、上記に述べた成果がほぼ十分に保障されていると評価される。論文題目に照らしていえば、第1部の第2章、第3章、第2部の第4章、第5章が中心的内容で、「日本語教育を視野にいれた」部分は第3部での展開に集約されている。中国人日本語学習者の用いる代表的な日本語教科書における指示詞の使用実態をここまで詳しく精査検討した研究は管見のかぎり、見当たらない。中国人日本語教育に資するところ、極めて大きいといえる。くわえて論文末尾に附された「指示詞研究文献目録」は、現時点でも最も整備された詳細な文献目録であり、今後の日本語学研究にも大きく寄与するものである。

以上のように本研究は十年余にわたる邱麗君氏の研究の集大成であり、丹念な用例の比較実証にもとづく力作である。指導主査にあたった印象では、一貫して指示詞の研究に日々研鑽を積んできた氏の学術研究姿勢は高く評価されるものである。日本語学全般にわたる教養知識についても博士学位授与、に十分ふさわしい背景、人徳を涵養していると判断される。対照研究の本来の任務、すなわち理論研究のありかたと教育実践との連携においては、なお工夫すべき課題が残されており、照応関係の究明には文学作品のみならず多くの事例の収集分析研究が必要である。方法論的、また論述の構成においていくつか不十分な点があるものの、今後の研究、研鑽によって克服されるものであり、本研究の総体的な評価を大きく損なうものではない。本研究をもとに更なる研究の進展が期待される。

5. 結論

審査会終了後、指摘された諸点について数次にわたって慎重に審議を重ねた。その結果、以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は全員一致をもって、本論文は博士（日本言語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以上

口述審査会実施日：2014年1月30日、午後14時から16時半まで。於、大東文化会館。

履歴書・学術業績書

(2013年10月提出時現在)

年号	年月	学歴・職歴・研究歴・賞罰（項目別にまとめて記入）
【学歴】		
2002年	4月	文教大学文学部日本語日本文学科入学
2006年	3月	文教大学文学部日本語日本文学科卒業
2006年	4月	早稲田大学大学院日本語教育研究科日本語教育学専攻修士課程入学
2008年	3月	早稲田大学大学院日本語教育研究科日本語教育学専攻修士課程修了
2011年	4月	大東文化大学大学院外国語学研究科博士課程後期課程日本言語文化学専攻入学
2014年	3月	修了見込み
【職歴】		
2008年	5月～現在	中国河南農業大学外国語学院日本語学科（専任講師）
【研究歴】		
学術論文（※は査読あり、◎は学会誌および外部査読誌）		
2011年	4月	◎〈第二语言习得中误用原因的调查研究〉《河南广播电视台大学学报》第1期 河南广播电视台pp.54-56
2011年	5月	◎〈从母语迁移理论谈日语教学中误用的避免〉《河南教育学院学报》第2期 河南教育学院 pp.134-136
2011年	12月	◎「中国における日本語指示詞の用法別理解度調査」『世界日本語教育大会論文集』世界日本語教育大会pp.522-523
2012年	3月	「日中指示詞の対照研究-『アノ』に対する中国語表現の比較と分析-」『外国语学会誌』41号 大東文化大学外国语学会pp.267-280
2012年	3月	※「日本語教科書に現れる用法別指示詞の調査- 四種類の日中教科書との比較を通して-」『外国语学研究』第13号 大東文化大学大学院外国语学研究科 pp.233-244
2012年	3月	「日本語学と日本語教育学における指示用法のとらえ方」『指向』第9号 大東文化大学大学院外国语学研究科日本言語文化学専攻pp.135-148
2013年	3月	「《中日交流標準日本語》初・中級における用法別指示詞の全数調査」『外国语学会誌』42号 大東文化大学外国语学会pp.241-255
2013年	3月	※「《新編日語 I.II.III.IV》における用法別指示詞の全数調査- 日本語教育の視点から-」『外国语学研究』第14号 大東文化大学大学院外国语学研究科 pp.195-202
2013年	3月	※“这/那”的指示機能虚化から見た中日指示詞の非対応」『語学教育研究論叢』第30号 大東文化大学語学教育研究所pp.49-65
2013年	3月	「指示詞研究文献目録」『指示詞研究の新地平日本語と外国语との対照研究』語学教育フォーラム第28号 大東文化大学語学教育研究所pp.157-209
2013年	6月	◎〈中日指示词的文脉用法中不对应现象探析〉《郑州航空工业管理学院学报》第3期 郑州航空工业管理学院pp.88-93
2013年	10月	◎〈论日本文字对汉字的借鉴〉《郑州大学学报》第5期 郑州大学pp.140-142
2013年	12月	◎〈从日中对照的视角分析日语译文中指示代词的省略现象〉『国際連語論学会連語論研究（II）』国際連語論学会pp.134-143
2013年	12月予定	◎「日中指示詞の対照研究-“这”が「コ・ソ・ア」系指示詞に翻訳された例を中心として-」『ことば』第34号 現代日本語研究会pp.59-72
【学会発表】（※は主要学会全国大会、国際シンポジウム）		
2011年	8月	※「中国における日本語指示詞の用法別理解度調査」2011年世界日本語教育研究大会（於、中国・天津外国语大学 8月21日）

2011年	11月	※「日本語教科書における用法別指示詞の全数調査-『新編日語I.II.III.IV』を中心として-」2011年度第3回「東西文化の融合」国際シンポジウム（於、大東文化会館 11月6日）
2012年	6月	※「日本語教科書における用法別指示詞の全数調査 - 『中日交流標準日本語初級（上・下）・中級（上・下）』を中心として-」2012年度第4回「東西文化の融合」国際シンポジウム（於、大東文化会館6月17日）
2012年	7月	「小説の訳文から見た非現場指示用法の中日対照研究- 中日指示詞が対応しない場合-」日中対照言語学会月例会（於、東洋大学 7月21日）
2012年	12月	※「“这/那” の指示機能虚化から見た中日指示詞の非対応」日中対照言語学会第28回冬季大会（於、大阪産業大学12月9日）
2013年	2月	※ 国際連語論学会設立大会2013年「日中対照の視点から見た指示詞の省略表現」（於、大東文化会館 2月9日） 【共同研究】(※は研究代表)
2011年	4月	※2010年度中国河南省社会科学院による共同研究（河南省社科联河南省经团联调研课题《外语中母语迁移现象的研究》（SKL-2010-1432）
2012年	12月	※2011年度中国河南省政府による助成研究（河南省政府决策研究招标课题）《中原经济区建设背景下的外语创新型复合人才培养》（2011B253）
2013年	3月	2012年度大東文化大学応用日本語学研究会による共同研究 『指示詞研究の新地平 日本語と外国語との対照研究』
2014年	12月予定	※2012年度中国河南省教育厅による共同研究 河南省教育科学规划课题 《借鉴国外外语教学方法提高河南高校外语教学的研究》（2014年刊行予定） 【賞罰】
2011年	4月	2010年度中国河南省社会科学院による共同研究（河南省社科联、河南省经团联调研课题）《外语中母语迁移现象的研究》 (SKL-2010-1432 : 研究代表) 一等賞受賞
2012年	12月	2011年度中国河南省政府による助成研究（河南省政府决策研究招标课题）《中原经济区建设背景下的外语创新型复合人才培养》 (2011B253 : 研究代表) 三等賞受賞

以上